

未来を生きる
ための

読解力の強化書

佐藤 優
Masaru Sato

はじめに

作家として第二の人生を歩むようになって、15年以上経ちました。現在、私は61歳。還暦を過ぎると、どうしても自分の残り時間を考えます。

厚生労働省が調べた日本人の健康寿命（介護などの世話にならずに、自立して生活できる上限年齢の平均）は男性が72・14歳、女性が74・79歳となっています（2016年）。

私自身、思うように仕事を続けられるのは、あと10年ほどとなります。ただし、慢性腎臓病を抱えている身なので、その時間はもつと限られてくると思います。

すると、必然的に仕事を選ぶようになります。限られた時間のなかで、できるだけ納得できる有意義な仕事がしたい。優先順位を考えて、仕事を絞り込むようになりました。

それに併せて、共に仕事をする人も絞られてきます。編集者にしても、これまで一緒にやってきて、心地よく仕事ができ、できるだけ最短距離で仕事を完成させることができる人に限られるようになりました。

そのような人たちの共通点は何でしょうか？ 色々考えてみると、それは「距離感」だということに辿り着きました。

お互い信頼し合い、しっかりと仕事に向き合う。ただし、必要以上に親密になるわけはありません。依存するのではなく、お互いが自立した関係で仕事を分担し、完成させる。その絶妙な「距離感」をお互い暗黙のうちに築けることが、一緒に長く仕事をしたい人たちの共通項なのです。ある種の「間合い」のようなもの、と言ってよいかもしれません。

ところが、なかにはその「距離感」をまったく無視して、一方的に自分のペースで仕事を進めようとする人がいます。これは会社の大小や学歴とは全く関係ありません。

ある出版社で雑誌の連載の話が決まり、その編集長と初めて会うことになりました。ところが開口一番、「この際ですから今回の連載以外に、ぜひお願いしたいことが…」と言って、いきなり新たな企画書を出して説明し出したのです。

こちらは連載の企画の打ち合わせだと思っていたので、急な話に面食らってしまいました。私が逆の立場であれば、まず初対面の挨拶とともに、今回の連載の話をもっと具体的に進めるのが筋です。

そして最初の連載がある程度軌道に乗り、お互い信頼関係ができたところで、次の企画の話を持ち掛けるでしょう。

少なくともその人は、私とは全く違う距離感で仕事をしている人だということはわかりました。私と「間合い」の取り方が違うのです。そして、このような人とは長く仕事はできないと感じました。

というのも、自分を抑えて仕事を進めても、何らかのトラブルが起きるのが、この手の人なのです。実際、連載自体は受けましたが、その終了後は新しい仕事を受けることはありませんでした。

おそらく、こういう人は相手の言葉だけじゃなく、声のトーンや表情から、いまどんな感情を抱いているかを読み取る力が決定的に欠けています。私なりの言葉で言うならば、「読解力」が欠如しているということになります。

仕事を続けているうちに何らかの齟齬や誤解が生まれ、本来ならトラブルにならないようなことが、大きな問題に発展するのです。

「読解力」とは一般的にはテキストを読み解く力と考えられていますが、私としてはもっと広い概念で考えています。その「読解力」の詳しい内容は、本書の以降の章で明らかにすると、とりあえずこの場でひと言で言うならば、「相手を正しく理解し、適切に対応する力」とでも言えるでしょうか。

読解力の豊かな人と仕事をすると、一を聞いて十を知るまでいかずとも、こちらの意図を素早く察知して先回りしてくれます。読解力の乏しい人と仕事をすると、説明したはずのことが伝わっていなくてももう一度説明し直したり、誤解や曲解によってトラブルが起きるなど、一の仕事が一にも三にも増えてしまいます。

一緒に仕事をするのに、「読解力」の高い人物——できるだけ楽しく軽やかに仕事ができる人を選ぶというのは、しごく当然のことではないでしょうか。

ただし、効率性や経済合理性を重視するビジネス社会においては、短期的には「読解力」の低い人物が成果を上げることもあるのです。

なぜなら、読解力が欠如した人は相手の気持ちや立場を忖度することなく、持ち前の強引

さで物事を進めます。だから、なりふり構わない仕事ぶりで、一見成果をあげたかに見えることがある。やつかいなことにこういう人物ほど、中間管理職までは順調に出世するのです。

ところが、短期的には成功しても、中長期的にはほぼ失敗するのもこのタイプです。結局人が離れていくので、その栄華は長続きしません。まれに先ほどの雑誌の編集長のように、現場組織の頂点にいる人は、その権力ゆえに意外に長くその立場に就いていることがあります。

しかし、会社の看板や役職など、肩書がなくなったとたん、見事に誰からも相手にされなくなります。

いずれにしても、「読解力」の低い人はビジネスにおいても、プライベートにおいても人間関係が破綻したり、トラブルが続いたりして、トータルで見ると損な人生を歩んでいる人が多いです。

逆に読解力が優れていれば、人間関係もうまく回り、トラブルも少なく、必要最小限の力で成果をあげることができます。仲間も増え、豊かな人生を送ることができるでしょう。厳しい時代を乗り切るために、さまざまな資格やスキルを身につけたり、能力を高めよ

うと努力している人がたくさんいます。しかし、私から言わせれば、まず「読解力」を身につけることこそが大事だ、ということになります。

さて、還暦を過ぎた私にとって、優先順位の高い仕事は何かを改めて自分に問いかけました。出てきた答えは、若い人たちに対する教育です。

自分がこれまで多くの先生や先輩から教わってきたように、後進を育てていくことが、いまの私の一番の仕事であり、使命だと考えています。残りの10年は、それにまい進したいと考えています。

今回、私は青山学院横浜英和中学高等学校の中学3年生に全3回の集中講義を行いました。テーマは「真理はあなたたちを自由にする」三浦綾子の『塩狩峠』を手掛かりとして「学ぶ」というものです。

その目的はズバリ、最初にお話しした「読解力」を身につけること。「相手を正しく理解し、適切に対応する力」は、名作と呼ばれる小説を読み解くことで身につけることができます。

それはテキストを論理的に把握し、同時に文章には表されていない「行間を読む」という作業が、そのまま相手（テキストであれ、人であれ）を正しく理解する力につながっているからです。

『塩狩峠』という作品は、明治時代、北海道の天塩線（現在の宗谷本線）での実際の事故を題材にして書かれた小説です。

塩狩峠に差し掛かったところで連結器が外れ、動力を失った客車が逆走を始めたとき、当時、鉄道職員だった長野政雄という人が自ら身を投げ、下敷きになることで暴走を止めました。本当の愛と自己犠牲について、キリスト教徒である三浦さんが問いかける力作です。いまの中学生にしては大変な長編小説であり、重いテーマかもしれませんが。だからこそ、このテキストの解釈を通してさまざまな考え方に触れ、読解力を高めてもらうことができれば、というのが狙いです。

私自身が、ちょうど同じくらいの年に『塩狩峠』を読み、深く感銘を受けました。その経緯は第3章で詳しく触れているので、ここでは省きましよう。

いずれにしても、難しい本を読み、内容を理解し、自分なりの言葉で意見や感想をまと

める。いまの時代にはまどろっこしくさえ感じる作業こそが、読解力を高めてくれる一番の方法なのです。

本当の勉強とは、たんに受験のための知識を蓄えることではなく、その後の人生の糧になる「素養」を育むものだと考えます。それが確固とした土台となれば、その後に得た知識は自ずと高く積み上がっていくはずです。それが脆弱であれば、すぐに崩れてしまい、なかなか積み上がっていきません。

その土台を築くのが中学生、高校生といった10代です。ところが残念ながら、最近はその大切な10代の時間を、SNSやゲームなどで徒に使ってしまう人があまりにも多いのです。

若い人にはまずSNSをやらないように、とアドバイスしています。連絡事項をやり取りするのは致し方ないにしても、そこに写真や動画をアップしたり、眩いたりすることは時間のムダだとはっきり言います。

SNSのわかりやすさ、短絡的で画一的な表現は「読解力」を下げってしまうと確信しています。

とくに、中学生は子どもから大人に成長していく一番重要な時期です。私自身、この年頃に優れた教師や大人たちに出会ったことで、世界がどんどん広がっていききました。

今回の集中講義に参加してくれた14人の目の輝きと真剣さに、ふと当時の私の姿がダブりました。私が大人たちから受け取ったさまざまな目に見えない財産を、私も目を輝かせている後輩たちに引き継ぎたい。バトンをつないでいけたら、という思いがあります。

身につけた読解力が、勉強はもちろんですが、人間関係でも仕事でも必ず良い結果に導いてくれる。人生の豊かな実りとなって返ってくるかと確信しています。

読者のみなさんは、もう中学時代などはるか昔のことだと思いかもしれません。しかし、ぜひ目を輝かせていた純粹な時代を思い出して、若い人たちと一緒に気持ちで本書を読んでいたければ幸甚です。

忘れていたことや見逃していたものが、そこにあるかもしれません。年頃の子どもがい
る人なら、それを自分の子どもに伝えることもできるはずです。

講義に参加してくれた青山学院横浜英和中学高等学校の皆さんは、私の想像以上に優秀

で可能性を感じさせてくれました。毎回3時間という講義と、提出課題にもしっかりと応えてくれました。前向きな皆さんの取り組みに感謝します。

また、今回の講義を企画し、講師として招いていただいた同校の小久保光世校長先生、宗教主任の鬼形恵子先生に多大なる感謝の意を表したいと思えます。

本書を上梓するにあたっては、クロスメディア・パブリッシングの坂口雄一朗氏、フリーランスの編集者でライターの本間大樹氏にたいへんお世話になりました。どうもありがとうございます。

2021年8月

佐藤優

第1章

人生は 読解力で決まる

本を読むほど思考が偏る	022
なぜコロナ陰謀説にハマるのか？	024
簡単な文章さえ理解できない学生たち	027
AIには読解力がない	030
読解力がないと仕事に就けない	033
SNSは異質なものを排除する	036
ある現象によって分断される米国	038
心地よい情報に囲まれた日本人	040
ワイプで人の表情を抜くのは何のため？	042
ナシヨナリズムは読解力の欠如から生まれる	045
相手の内在的論理を知る力	047
小説は読解力を磨く最高のテキスト	050
自分の当たり前を壊していく	052

「読む量」より「読み方」が重要	058
一見まともな文章にも矛盾が潜む	061
「演繹法」と「帰納法」の違いを理解する	063
接続詞を正しく使う	065
批判的に読めない日本人	068
主観や感情にとらわれない読み方	071
ドグマ思考に陥るのはなぜか？	073
あなたが掛けている「色眼鏡」は何色？	076
体全体を使って読む効果とは？	078
読解力の最終目標は行間を読むこと	081
プーチンが日本に送ったシグナル	083
優秀なはずの外交官が行間を読めない	085
言葉の裏を読めたら一人前	088

2

第2章
読解力とは
行間を読む力

力を身につける

読解力を構成する「要約」と「敷衍」	090
偏差値秀才は敷衍することが苦手	091
夏目漱石の作品で読解力を上げる	094

中学生——読書の面白さに目覚めた	098
三浦綾子さんの『塩狩峠』を読み解く	101
自分のなかに悪が存在することに気づいた	104
中学卒業後の春休みに一人で塩狩峠へ	106
人は誰かに感化されて生きていく	109
親子で読み、共に読解力を鍛える	111
批判的な態度で本を読むことが大切	114
三つの「愛」の形について考える	117

第3章
特別講義

小説を通して読解

- 1 回目はざっと読み、2 回目はじっくり読む
120
- 数学が苦手な人は社会に出てから苦労する
122
- 昔は音読するのが当たり前だった
125
- 聖書は男性と女性をどう描いているのか
129
- 読み飛ばさない。調べながら読む
132
- 言い換える力を身につける
137
- 主人公の目線から離れてみる
138
- 人間とはどこまでズルい生き物なのか
141
- ミルクティの美味しさを説明できる？
144
- ナンマイダって何のこと？
146
- 本を読めない人は一生救われないのか？
149
- 善人より悪人の方こそ往生できる
153
- 救われるのはエリート？ 非エリート？
156

なぜ欧米人はチャリティ活動に熱心か
人を助けるためとっさに体が動くことがある
心の奥底が揺さぶられる「感化」
最後は「善なるもの」が勝つ

158
161
164
165

どんな受け止め方をしても自由
批判的な意見があってもいい
「共感」と「違和感」を発表
危険なのに避難しないのはなぜ？
信夫の自己犠牲は正しかったか？
一般の乗客と愛する女性のどちらが大切か？
同情は相手を傷つけることもある

168
169
171
175
176
179
183

世のなかに正しい人は一人もない

186

自分を棚に上げて他人を責める人たち

188

自分の体験と結び付けて書くことが大事

190

ごまかすときに使われるトートロジー

193

信夫は三堀のために飛び込んだ？

195

あなたは、敵を愛することができるか？

197

人間は誰しも弱くて嘘をつく

200

女性はイエスを裏切らなかった

204

良い大人にどれだけ出会えるか

207

第4章

4 違和感を 大事にする

未来を読み解く力

集中講義によって得た力とは？	212
読解力が他の教科の力を上げる	214
理系の人ほど国語力を磨く	216
ENDのもう一つの意味とは？	218
西洋の「直線時間」と日本の「円環時間」	222
目的から逆算して計画を立てる	226
目的がないと世のなかに流されてしまう	230
お金も宗教の一つである	231
偏差値が低いと能力も低い？	234
専門知識よりもまず教養の土台を作る	236
迷えるフリーターが見つけた目的とは	238
やればできるという自信が彼を変えた	240
勉強するよりも大切なこと	242

5

現状がずっと続くわけではない

244

与えることができる人間になる

247

集中講義に対する感想（二部抜粋）

250

※本文中の聖書の引用は、『聖書 新共同訳』（日本聖書協会）を使用しました。